



作家

桐島洋子さん

今月のインタビューでは、作家・エッセイストの桐島洋子さんから、お話を伺いました。桐島さんが収集しているという、素敵な骨董品に囲まれてのインタビューとなりました。桐島さんのグローバルで波乱万丈な人生は、1回のインタビューにおさめることが残念なほど、聴きごたえがあるものでした。その人生経験に基づいた桐島さんの視点は、普段はなかなか得られない、様々な「気付き」を与えてくれました。インタビューで伺ったことは、弁護士として、1人の人間として、今後生きて行く上で重要な羅針盤となりそうです。

(聞き手・構成：町田弘香，鈴木啓太，柄澤愛子)

— 学校を出られた後、文藝春秋社に入社されたということですが、出版社への就職のきっかけはなんでしょうか。

子どもの頃からの憧れでした。戦後の窮乏期で、まだ本も少なかったけど、実家の蔵に戦前の本や雑誌が山のようにあって、それらを小学生の頃から読みふけていたんですね。なかでも『文春』を愛読したので、いつの日か文春の編集者になりたいと思ったのです。それで自分で『子ども春秋』という雑誌を創刊しましてね。もちろん本当に雑誌を作る筈はないけれど、自分を編集長に任命し毎月一人で編集会議をしては目次だけ作るわけ。今月はグラビアは誰にしようとか、巻頭随筆は誰に書かせようとか考えては楽しんでいる変わった子どもでした。

— 文藝春秋社では、ずっと編集の仕事がされていたのでしょうか。

高卒の女の子が最初から編集者になれる筈はなく、受付や庶務係ですよ。出版社には毎日山のような手紙が来るけれど、編集者は面倒くさかって、私みたいな雑用係に押しつける。

でも私は筆マメだから、そういう手紙の返事をきちんと書きました。それがとても評判がよくて。私が物

書きになって名前が出た頃、日本のあちこちから手紙が来て、かつて文藝春秋にお問い合わせの手紙を出したとき、懇切丁寧なお返事を桐島さんという方から頂いたんですけど、あれはもしやあなたのことでしょうか、とか。真面目に仕事しておくものだなと思いましたね。

それから、文春で文春句会というのが毎月開かれていたんですね。俳句なんて全く縁がなかったけれど、句会に出るとお弁当が出るので1食稼げるぞと食い気で出席してみたら意外に面白かったし、はじめからうまく出来て点を稼いでは賞品で実家からの独立の家財道具を揃えました。そこで、あの子はなかなか言語感覚があるなど認められたということもありますね。

それで3年ぐらいで編集局に配属になって、ここぞとばかり張り切って働いたら、どんどん文才を認められました。

— その後、働きながらお子さんを出産されましたね。

結婚退社の規定がある会社で、私は結婚なんてどうでもよかったけれど、子どもは欲しかったので、隠し子出産作戦。

妊娠中は、常にもましてしゃきしゃき働き、服装や

動作にも工夫を凝らしました。その頃、お転婆で、乗馬とスキダイビングとグライダーに凝っていたんです。妊娠中は流石に控えたけれど、乗馬道具を持って出勤して、今日は、軽井沢で乗馬なんです、とかデモンストレーションをしたから、そんな女の子のお腹が大きいなんて誰も思わないでしょう。

ということで疑われもせずに着々とお腹が大きくなって、最後の2カ月間だけはいくら何でも隠せないで、急性腎炎の転地療養と称して二宮（神奈川県）の海岸に家を借り、朝夕泳ぎながら素晴らしい夏休みを愉しみ、出産一週間後には子どもを人に託して出勤し、仕事に復帰しました。

あんまりうまくいったのでいい気になって翌年また1人つくっちゃって。8カ月まで隠して働くということは前回同様うまくいったんだけど、最後の2カ月をどう休むか。2年続けて腎臓病というわけにもいかないので、何かいい方法はないかなと。

海外渡航が自由化されたばかりで、早く海外に行きたいと地団駄ふんでいるときだったので、子どもを産むので2カ月ずる休みをするんだったら、その2カ月を利用して海外旅行もしてきちゃえば一挙両得だと思って。しかも船の上で子どもを産むと出産費用はただだという噂を聞いて、これだと思って、船の上で産むことに決定し、シベリア経由でヨーロッパに出て、汽車で北欧、イタリア、フランスなどを巡って、マルセイユからフランス客船に乗り込みました。

—なるほど（笑）。

歓迎パーティーのとき、船医さんに「実はお腹が大きいのです」と挨拶したら「船の医者というのは、腹痛と性病と風邪の手当てぐらいが仕事で、妊婦なんて学校を出てから30年間会ったことがない」と震え上がっていました。私が上陸のたびに、はりきってラクダで砂漠をかけまわったり、ピラミッドに登ったりするものだから、毎日心配でオロオロしっぱなし。こちらは一ヶ月の航海をしっかりと愉しみ、最後の香港を出発したのが予定日の3日前。もう生まれてくれな

いと日本に着いてしまうので焦りまくり、飛び跳ねたりしてお腹をゆすり、赤ん坊をせき立てました。航海最後の日、やっと陣痛が始まったけど何食わぬ顔でクリスマスイブのパーティーに。明け方に医者に電話をしたら、目やにだらけの顔で吹っ飛んできて、周章狼狽というのはこのことかというパニック状態。私が「すべての症状は正常ですから、どうぞ気をお確かにお持ちください」と叱咤激励したらやっと気をとりなおし、看護婦さんと呼ばひに飛び出して行って、帰ってくるのを待たずに赤ん坊が飛び出してきちゃったの。ああ、女の子だなど思っているところにお医者さんが戻ってきたので、おかげさまで無事に生まれました、後始末をお願いいたします、とお渡ししてめでたしめでたし。

—すごいですね（笑）。

野蛮な人なんですよ、私って（笑）。

—その後、ベトナムで従軍記者をなさっていますね。

結局、文春を辞めたあと、何かしなきゃと思っていたときに、子どもたちの父親だったアメリカ人の彼が、ベトナム行きの貨物船の船長になったので、私も同行。折しもベトナム戦争たけなわで、そうしたら、私が文春時代に仲よくしていた外人記者が従軍記者になっていて、あちこちで会うので、そうだ、私もこの際、従軍記者になろうと思ったんです。

私が軍の司令部に挨拶に行ったら、女の記者なんていないからぎょっとはされるけど、でもそれ以上は何にも言わない。従軍記者証さえあれば男も女もない。女だからといって一切特別扱いはしない。「Take your own risk」、つまり自己責任だよと念を押されて勇躍戦場に乗り込んでいきました。

—従軍記者のご経験を通して、人生や考え方にどのような変化があったのでしょうか。

最前線では、塹壕に兵士たちと身を寄せ合って弾を避ける命がけの毎日です。アメリカの田舎から来た

貧しく純真な若い兵士が、「僕は貧しくて大学に行けなかったけど、兵役が終わると奨学金をもらえて学校へ行けるかもしれないから、僕は絶対医者になってベトナムの傷ついた子どもを治しに戻ってきてやりたい」といった夢を語り合う。

語った翌日には、手足や頭を飛ばされたりして死体になって、転がっているわけですよ。私はすでに子どもを産んで生命の再生産を果たしていたけれど、その若者たちは、まだ人生の門口に立ったばかりで、人生何もしないうちに理不尽に命をもぎとられていく。

それを毎日見ていたから、以来私はサバイバーズギルト、つまり生き残った者の罪悪感を負って生きています。私も俗物だから、お金も名誉も欲しいけれども、ある程度満たされると、これ以上欲張ったら罰が当たる、あそこで無念の死をとげたあの若者たちに申し訳ないという思いが私を後ろに引っ張るわけですよ。

——昭和43年に渡米されて、最初のエッセイの『淋しいアメリカ人』で大宅壮一ノンフィクション賞を受賞されました。アメリカの印象というのは、どのようなものだったのでしょうか。

物質的に豊かではあったけど、それが必ずしも人間を豊かにしないということを、まざまざと見せつけられる文明でしたね。私なんて、底辺に近いところにいて、人々の魂のうめきを聞くような場面が多かったから、これをちょっと何かまとめてみたいと思ってエッセイに書いたんです。

——その後、昭和51年に『聡明な女は料理がうまい』がベストセラーになりました。

本当は、愛についてという本を頼まれたのですが、その時、ものすごい失恋の直後で、愛なんて聞いただけで血が噴き出しそうだったので、それだけは勘弁してよ、代わりに料理の本はどう？料理だって愛なんだからということ提案したのです。だから、レシピブックじゃなくて、あれは人生論というか生活論ですね。それがなぜか非常に受けちゃって。

——愛情とか恋愛とかってどういうものだと思いますか。

愛というのは、独占欲とか憎しみと裏表になっていて、必ずしも美しいことばかりじゃない。いいことばかりではないでしょう。私はそれはいい加減に卒業して、コンパッション、日本語にすれば慈愛というのかな、もっとひろやかに人々を愛したいですね。

——結婚はどういう意味をもっていると、思われますか。

結婚はしても、しなくてもいいけれど、まあ古今東西世界中で採用され続けて来ただけのことはある賢く具合のいいシステムだと思います。

苦しいことは一人で耐えた方が気楽なことが多いけど、楽しいことは分かち合う相手がないとつまらない。特に子どもをつくるなら相手と喜びを共にしたいですね。結婚しなきゃという強迫観念で、できない人が不幸になったりしたりするのはばかばかしいと思いますけどね。

——『聡明な女は料理がうまい』を書かれた後、お子さんを連れて海外へ移住されました。

本のお金がちょっと入って、自分に褒美をやりたいと思ったけど、物欲に欠けるので欲しいものがない。そうだ、欲しいものは休暇だと思いついたんです。30代って疾風怒濤で本当に忙しかったから、休暇を。日本にいと、仕事はどこまでも追い掛けてくるから、外国へ行ってしまおう。ニューヨーク郊外のイーストハンプトンという世にも美しい海辺の町で一年半暮らしました。

これがすばらしかったんですよ。まず子どもたちを美しい自然の中で自立した生活者としてきたえることができた。私は日本語にうるさい人間だけど、日本でいくら言葉遣いを直そうとしても、周囲の悪い影響が強いです。アメリカでは私一人が相手だから、しっかり日本語の躰ができたし、英語は回りが教えてくれるからたちまちバイリンガルになりました。

瞬間に力を抜き自分を「空」にする能力は私の人生の最高の宝物、人生のいろいろな場面で私を助けてくれます。

弁護士が自然体で商売ができるのかどうか疑問だけど、極力力を抜く訓練をなさるといいと思いますよ。

桐島洋子



——波瀾万丈な人生を送られていますが、道が分かれた時の決断の指針はありますか。

私は海育ちで、海から素晴らしい贈り物を2つ貰いました。

子どもの頃から毎日海に入り、まっすぐ水平線を目指して泳ぎました。でもおぼれたって誰か助けてくれるわけじゃないから、いつも天候や体調や海の具合や、あらゆることを総合的に把握し、今日はここまでにしようとか、今日はもうちょっと行こうとか、安全と危険のぎりぎりのボーダーラインを把握する癖がついたんです。それを内なる重心と名付けているんですけどね。

もう1つは、海で泳いだら波が来ますよね。ある日、大きな波があまりにも急に近づいてきて、ああ、もうだめだ、勝手にしろとヤケッパチに身を委ねちゃった。そうしたら波が意外に優しく私を抱き上げて、抱き下ろしてくれて、そうか、逆らったり、逃げたりしないで身を任せればいいんだと気がついた。男相手に、そんなことは言えないけれど、あなた任せの手弱女になることにしたんです。自分を空っぽにしさえすれば、どんなに大波でも大丈夫だということが分かったんですよ。

瞬間に力を抜き自分を「空」にする能力は私の人生の最高の宝物で、波に限らず人生のいろいろな場面で私を助けてくれます。人から見たら冒険的な人生をおくってきたから、私が、まなじりを決してやって

やるぞと頑張っていると思われるかもしれないけど、逆で、そういうような状況になるほど、ふっと力を抜いてお任せしちゃうんですよ。そうすると何かうまくいっちゃうのね。

——東京弁護士会では若手の会員がどんどん増えてきています。特に20代、30代の若手に向けてのメッセージをいただけませんか。

なるべく自然体で、弁護士が自然体で商売ができるのかどうか疑問だけど、極力力を抜く訓練をなさるといいと思いますよ。つまりリラックスですよ。日本人ってすごくリラックスしにくい民族じゃない。もうとにかく頑張ろうでしょう。私は海で育ったおかげで結構それができたんだけど、難しいかもしれないけれど、そういう訓練をしたらいいと思いますね。

#### プロフィール きりしま・ようこ

1937年生まれ。東京都出身。エッセイスト、ノンフィクション作家。文藝春秋に入社し、9年間ジャーナリズム修行ののち、フリーライターとして世界を巡遊。その後、従軍記者としてベトナム戦争を体験する。1968年からアメリカで暮らし、1970年に「渚と滯と舵—ふうてんママの手紙」でデビュー。刊行を機に帰国。「淋しいアメリカ人」で第3回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。以来マスメディアの第一線で著作・テレビ・講演などに幅広く活躍中。また、大人の寺子屋「森羅塾」を主宰し、環境問題等にも深い関心を寄せている。「マザー・グースと三匹の子豚たち」「いつでも今日が人生の始まり!」「女が冴えるとき」「骨董物語」「聡明な女たちへ」「聡明な女は料理がうまい」など著作多数。